

〔学術論文〕

## カント哲学前批判期の解明(その3)

－講義計画と視霊者の夢－

Die Erklärung der frühen kritischen  
Phase von Kantischer Philosophie, 3 Teil:  
Die Einrichtung seiner Vorlesung und  
Träume eines Geistersehers

森 哲彦

von Tetsuhiko Mori

「私は、多数の霊界の物語が知らされているにもかかわらず、その物語を否定する側に立とうとしていることこそが、健全な理性の規則に最も相応しいと常に考えた」  
(Zu C.A. von Knobloch, 1763.10. Aug. *Kant's Briefwechsel* : Bd. X43-44)

**要旨** カントには、1760年代半ばの経験的、懐疑的形而上学期の代表的著作として、1『美と崇高の感情に関する観察』1764年、2『美と崇高の感情に関する観察のための覚書』1764-1765年、3『1765-1766年冬学期講義計画公告』1765年および4『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』1766年が挙げられる。本稿では『講義計画』と『視霊者の夢』の内容について、その精神史的理解の解明を行うものである。

さて『覚書』では、学問観は、認識の学から人間中心の学へ転向する。カントが重要視する人間は「自然の人間」つまり「自然の単純さと自足が認められる人間」(XX6)である。『講義計画』では、この「自然の単純さ」に基づき、大学講義も「自然の順序」(II305)に従って、知性から理性へ至る「指導上の規則」(II306)に依拠するべきとする。そこで形而上学の講義では、存在論からでなく「人間に関する形而上学的経験学」(II309)から始めるとする。その形而上学について、カントは『判明性研究』1764年で「形而上学は、理性のより普遍的な洞察に適用された哲学に過ぎない」(II292)とし、また『覚書』では「形而上学は、人間理性の限界についての学である」(XX181)とする。これに反して当時、人間理性の限界を越えて「形而上学の夢」を語り、話題になっていたスウェーデンボリに対する批判が『視霊者の夢』である。

**キーワード** : 自然の順序 (natürliche Ordnung)、知性 (Verstand)、理性 (Vernunft)、  
形而上学の夢 (Träume der Metaphysik)、霊界 (Geisterreich)、  
可想界 (mundus intelligibilis)

## 目次

- I 序
- II 自然科学期
- III 独断的、論理的形而上学期 (以上『人間文化研究』第7号)
- IV 経験的、懐疑的形而上学期 (以上『人間文化研究』第9号)
- V 経験的、懐疑的形而上学期II (本号)

## V 経験的、懐疑的形而上学期II

### 1 『講義計画』1765年

1 カント (I. Kant) は『美と崇高の感情に関する観察のための覚書』(『美と崇高の感情の覚書』) 1764-1765年<sup>1)</sup>において「ルソー (J.-J. Rousseau) の影響の受入れ」<sup>2)</sup>により、学問観について、知識や認識の学から、人間の学の優越性への「変化」<sup>3)</sup>を示す。この時期に変化するカントの新しい思考は、哲学という学問の在り方を示す講義方法に見出されるものとなる。それはカントが、従来の「重いハンマーを同じ調子で振り続ける」<sup>4)</sup>とする古い教授法に対して「若干の変更を有益と考えた」(II313) ことによっている。その有益な変更を示す著作が『1765-1766年冬学期講義計画公告』(『講義計画』) 1765年<sup>5)</sup>である。

まず初めにカントは「青年のすべての指導」(II305) には「自然の順序 (natürliche Ordnung) に従えば」(II305) 知性の成熟の後に理性による認識を得るものである。しかし従来の教授法には「経験のある理性 (Vernunft) によってのみ理解され得るような認識を、知性 (Verstand) の成熟を待たずに、授けてやらねばならないという〔転倒した〕厄介なところがある」(II305) とする。この理由から「頑固で愚かしい学校〔大学〕の果しない先入観」(II305) と「若い思想家の早熟な饒舌も生じる」(II305) とする。しかし他方でこれらの転倒は「非常に飾り立てられた市民的組織の〔今日的〕時代においては」(II305) 「立身的手段に属する」(II305) ので、カントはこの事態をルソー流に否定するのではなく、あくまで「自然の順序」に従って「変更」しようとするのである。つまりカントのいう人間の認識は、まず「知性が経験によって直観的判断へ、そしてこれらの判断によって概念に到達することにより、最初に知性が完成され」(II305) さらに「理性によって根拠と帰結を認識し」(II305) そして最後に「学問による秩序ある全体」(II305) へと進歩するというものである。その「自然の順序」に従えば、大学教育は、まず「知性的人間を、ついで理性的人間を、そして最後に学者の育成に進むことが期待される」(II305)。しかし例え、知性的人間が、学者にならなくても彼〔知性的人間〕は「人生に対して一層熟練し、かつ一層聡明になって」(II306) おり、従って

「盲目的」(II305) はないのである。ここでカントのいう「非常に近い類似性」(II311) を持つと考えられる知性と理性概念の区別は、その能力について、次のようである。つまり知性は「経験についての判断により訓練」(II306) させることで「知性は、活動的で市民的な生活に役立つ」(II311) 能力である。これに対し「学識ある理性」(II311) は「観想的な生活に役立つ」(II311) 能力である。それゆえここでは「理性の批判」(II311) が必要とされるのである。つまり従来の教授法が、知性から理性への「自然の順序」を転倒させて、理性から始めるので、大学においては「知性をほとんど示さない学者(学んだだけの者)に出くわす」(II306) とするのである。

2 ではカントが思考する新しい教授法とは、何か。それは「指導上の規則」(II306) つまり「まず第一に知性を成熟させ、知性の成長を速めること」(II306) そして「知性を経験についての判断により訓練させること」(II306) これである。要するに「学生は考え (Gedanken) ではなく、考えることを学ぶ (denken lernen) べきである」(II306)。換言すれば、学生は知識[考え]を記憶する[学ぶ]のではなく、経験判断を訓練する[考える]ことを学ばねばならない、ということである。ただしこの「指導上の規則」は、哲学についてのものである。そこでカントは、哲学と他の学問の「指導上の規則」の相違を示すことにより、哲学の特質を明らかにしようとする。そのためカントは「全ての学問を歴史的学と数学的学」(II306) および哲学とに分類する。このうち歴史的学と数学的学は、学ぶことのできる部門である。つまり両者は「一つの既に出来上がった学科として目の前に置かれ得るものとして、記憶の中に、もしくは知性の中に押印することが可能である」(II307) ので学ぶことができる、とする。しかし「哲学(Weltweisheit)には特有の性質があり」(II306) 新しい「教授法が必要となる。哲学は本来、壮年期(Mannesalter)の仕事である」(II306)。従って「[高等]学校教育を終えた青年は[知識を]学ぶことに慣れていた。今や青年は、哲学を学(Philosophie lernen) ぼうとするが、これは不可能である。なぜなら青年は、今度は哲学することを学(philosophieren lernen) ばねばならないから」(II306) である。では「哲学することを学ぶ」という「哲学に固有の教授法」(II307) とは、何か。それは「二三の先人達の呼び方に従えば、探求的(ζητεῖνから)、即ち研究的」(II307) である。重要なことは、青年にとって「熟考と推論の方法の練磨」(II307) である。換言すれば「哲学を学ぶ」(II306) とすれば、例えば、歴史学は歴史学者に、数学は数学者に依拠するように、哲学でも哲学者に依拠するものとなる。これに対し「哲学することを学ぶ」(II306) ためには、哲学者の著書に依拠するのではなく、つまり「判断の原型としてでなく、著者に関してのみならず、著者に反して判断すべき機縁としてのみ見られるべきである」(II307) とする。以上のような哲学「指導上の規則」に基づいてカントは、形而上学(Metaphysik)、論理学(Logik)、倫理学(Ethik) および自然地理学(physische Geographie) の「講義計画」を発表する。

3 形而上学についてカントは、かつて『美と崇高の感情の覚書』において「形而上学は、人間理性の限界 (Schranke der menschlichen Vernunft) についての学問である」(XX181)として、伝統的形而上学を批判している。また『自然的神学と道徳の原則の判明性に関する研究』(『判明性研究』) 1764年<sup>6)</sup>において「数学的認識と哲学的認識」(II276)の比較において「数学はその全ての定義において総合的に到達するが、哲学は分析的に到達する」(II276)としているように『講義公告』でも「形而上学の方法は、数学の方法のように総合的でなく、分析的である」(II308)として、人々による形而上学固有の方法についての従来の誤解を正そうとする。さらにカントが哲学「指導上の規則」に基づき、使用しはするが依拠しない著者と哲学書は、バウムガルテン (A. G. Baumgarten) の『形而上学』1739年<sup>7)</sup>であり、それを次のように変更する。つまりバウムガルテンのように「抽象的なもの〔存在論〕」から「具体的なもの〔経験的心理学〕」へと逆に、カントは「具体的なもの」としての「人間についての形而上学的経験学」(II309)から始め、次に「万物の一般層一般的な諸性質についての学」である「存在論」(II309)に、最後に「万物の原因の考察と世界の学」(II309)へ進む、とする。このように変更された教授法によれば、受講する青年に対して、形而上学の講義は「難しい学である存在論」(II310)からでなく「易しさによって解り易く、面白さによって好ましく」(II309-310)「有益である」(II310)「経験学」(II309)から始める方が、教授法は「それ独自の効用を保持する」(II309)ものとなるのである。

4 論理学についてカントは「自然の順序」に従って二分する。まず「第一の論理学」は「健全な知性〔常識〕の批判と規定」(II310)であり「活動的で健全な知性の育成に役立つ」(II311)ので「大学の指導の初めに一切の哲学に先立って与えられるべきもの」(II311)である。カントはこの論理学講義には、カントが依拠しないとすするマイヤー (G. F. Meier) 教授の哲学書『理性論の要約』1752年<sup>8)</sup>を使用する。そして「第二の論理学は、本来の学識 (Gelehrsamkeit) の批判と規定」(II310)であり「一つの全体としての全哲学の批判と規定である」(II310)。「この完全な論理学」(II310)は「鋭敏にして学識ある理性の陶冶」(II311)に役立つので、大学の「指導に際して全指導の終りにおいてのみ有し得る」(II311)ものとする。

5 倫理学についてカントは、道徳的哲学 (moralische Weltweisheit) と形而上学を比較し「道徳的哲学は形而上学よりも早くから、学の外観や徹底性の名声を得ている」(II311)とする。というのも「道徳的な正当性に関する判断」は「感情と呼ばれるものを通じて容易に正しく認識され得るという点にある」(II311)からである。そこでカントは、道徳的哲学の講義について「一般実践哲学と徳論 (Tugendlehre) の両方」(II311)をバウムガルテンの哲学書『実践哲学綱要』1760年<sup>9)</sup>を使用しながら講述しようとする。まず「一般実践哲学」でカントは、シャフツベリ (A. A. C. Shaftesbury)、ハチスン (F. Hutcheson) およびヒューム (D. Hume) の試みは「未完成であるが、

全ての道徳性の第一根拠の探求では、最も進んでいる」(II311) 道徳感情論である、としつつも「この試みに欠けている」(II311) 部分を、バウムガルテンの哲学書から補うとする。次に「徳論」でカントは、人間の研究方法を示めそうとする。すでにカントは『美と崇高の感情の覚書』で、ルソーの研究方法は「人間の様々な仮の姿の中に、深く隠された人間性と隠された法則を初めて発見した」(XX58)としている。これに従ってカントは「人間を研究しなければならない方法を判明させる」(II311) という研究方法は、人間の偶然的な状態や可変的な形態によってでなく「不変的な人間性と創造における人間性固有の位置〔法則〕」(II311) を判明することである。そしてカントによれば「道徳的研究のこの方法は、我々の時代の一つの素晴らしい発見であって、その方法を完全な計画において熟考するならば、先人達〔道徳感情論者達〕には全く知られていなかった」(II312) 徳論を意味するものとなるのである。

6 自然地理学の講義を始めた2年後の1757年夏学期にカントが発表した『自然地理学講義要綱および公告』<sup>10)</sup>において、自然地理学の必要性を、次のように考える。つまり「啓蒙された今日の時代、知的趣味の普及は著しいものがある」(II3) とすれば「地球上の自然の驚異を知ること、何の興味も示さないような人は、ほとんどいないと考えても差つかえない」(II3)。しかるにカントが大学で教授し始めた1755年頃、学生は「経験を積むこと」(II312) をせず「それに代わり得る十分な歴史的知見」(II312) すら持たないことを知るに至る。そこでカントは「地球の今の状態に関する歴史もしくは最広義の地理学」(II312) という「学科を自然地理学と名づけ」(II312) て開講していたのである。しかしカントは、8年後の今日(1765年)の『講義計画』での自然地理学について、地球上の自然的な部分を短縮し、もっと一般的で有益な地球の他の部分に関する論述の拡大を考える。そこでカントは、この拡大された自然地理学、つまり地理諸学は「自然的、道徳的および政治的地理学となるだろう」(II312) とする。そのうち自然的地理学は「商工業を通して諸国家に与える影響」(II312) を、道徳的地理学は「地球上の人間を、その自然的な特性と多様性と、人間にあつての道徳的なものとの違い」(II312) を、そして政治的地理学は「地球上の諸国家と諸民族の状態」(II313) を考察する。

以上のように、カントにとり新しい教授法とは「自然の順序」(II305) に従い「指導上の規則」(II306) は「知性と経験についての判断により訓練させること」(II306) であった。これにそう学科が地理諸学である。このような学科は「快適で教訓的な、解り易い知見の極めて多様なもの」(II313) であるが、社交的な[18]世紀においても「学問として少しも品位を落とさない」(II313) とする。もしそうでないとするなら演説家イソクラテス(Isocrates)<sup>11)</sup>のように「私に知っていることは相応しくなく、相応しいことは私は知らない」(II313) という苦境にはまり込むより外ないことになる。従ってカントは、従来の教授法の変更を、テレンティウス(P. Terentius)<sup>12)</sup>のように「君は君が行ふべきように行ふせよ(Tibi ut opus facto est, face.)」(II313) とするのである。

## 2 『視霊者の夢』 1766年

1 カントは『講義計画』において見られるように「人間の認識の自然な進歩は」(II305) 理性ではなく「最初に知性が完成され」(II305) なければならない、としている。にもかかわらず大学では「知性を余り示さない学者に出くわすのが稀ではない」(II306) と危機意識を顕にする。そしてこのような「学者」についてカントは『美と崇高の感情の覚書』では「学問をもって身を飾ろうとする大多数の人々は、決して知性の改善を得るのではなく、むしろただ知性の転倒を獲得するに過ぎず、しかもいうまでもないが、学問は大多数の人々に虚栄の道具 (Werkzeugen der Eitelkeit) として役立つに過ぎない」(XX39) とする。そして学問のためにこの「虚栄の道具として役立つ」ようとする「感覚の夢想家」(II342) に対し、カントは「批判を一人の同時代人に適用する機会を得る」<sup>13)</sup> のである。その同時代人とは、スウェーデンボリ (E. Swedenborg) に他ならない。このスウェーデンボリの全8巻著作『天界の秘儀』1749-56年<sup>14)</sup> を取り上げ、批評したカントの著作が『形而上学の夢によって解明された視霊者の夢』(『視霊者の夢』) 1766年<sup>15)</sup> である。カントはすでに『美と崇高の感情の覚書』において「形而上学は、人間理性の限界についての学である」(XX181) としているので、人は「形而上学の夢」からではなく「形而上学の経験学から始める」(II309) とする。そしてカントは、メンデルスゾーン (M. Mendelssohn) への手紙<sup>14)</sup> で、「知性が洞察に到達するためには、ただオルガノン機関 (Organon) 認識の道具が有りさえすれば良い」(X71) とするのである。とはいえ一方で「形而上学の夢」批判は、カントにとり重要なことなのである。しかしこのように重要性を認識しながら、他方でカントは、著作の「前置き」で読者に対し、一種のイロニーをもって「ほとんど僅かなことしか約束しない」(II317) とする。その著作構成は、次の通りである。カントは、本論「靈魂学」の第一部「独断的な」部分で「形而上学の夢」を吟味し、その「理論的結論」を論述する。第二部「歴史的な」部分では、スウェーデンボリの著作を解明し「本書全体の実践的結論」が論述される。

2 ではカントが「僅かなことしか約束しない」とする「前置き」の表現は、何を意味するか。カントによれば「あの世は夢想家たちの天国である。ここで彼等は、彼等が随意に開拓することのできる、限り無き土地を見出す」(II317)。また「哲学者たちは、あの世の「見取図を描き、またそれを変更し、あるいはそれを投げ捨てる」(II317) のである。ではこの夢想家や哲学者による「靈界 (Geisterreich) の特権」として「世に行われる物語」は、なぜ「流布されて、教義組織にさえ、密かに入り込むのであろうか？」(II317) という問いに対し、カントによれば、今日の伝統的哲学者には「一切の靈的現象の正当性を理性的に否認すべき」(II317) 「種類の根拠を上げることができあろうか？」(II317) と疑問を呈し、否とするのである。つまりその理由は、哲学者が「余計な問題に全く関わらないで、有益なものに頼るという場合」(II318) 「この計画は、理性的である

ために、常に頑迷な学者たちの多数派から非難されていた」(II318) ことによるのである。そのためカントは「いくつかの物語の真偽をしっかりと調査したと告白する」(II318)。しかしながらカントは、それにもかかわらず調査において「探求すべきものが何もない場合、通例そうであるように——何も見出さなかった」(II318) とする。従って本書において「事柄の性質上、読者が最も重要な部分〔知性界〕を理解せず、主要でない部分を信用せず、残りの部分を嘲笑するであろうゆえに」(II318)「ほとんど僅かなことしか約束しない」(II317) とするのである。

3 カントは、結論からいえば、読者を「最初に出発したのと同じ無知 (Unwissenheit) という地点に連れ戻した」(II367) とする。この「無知」とは、カントによれば「私は知らない〔認識しない〕という便利で多くの場合、理性的でもある言葉」(II319) すなわち「私のような無知の者 (ἀνεπιστημονος)」<sup>17)</sup> というソクラテスの無知であり、その無知は「大学では容易に聞かれない」とする。これに対し、大学で無知を恥じとする近代哲学者たちは、霊とは「一体いかなる種類のものなのかという疑問」(II319) について「霊 (Geist) とは理性を有する存在者である」(II319) とする。それならまず「霊的存在者 (geistiges Wesen) とは、どのようなものと考えべきか」(II319) を、カントに対して「理解し得るよう配慮しなさい」(II319) とする。これに対し、近代哲学者たちは「この種の単純な存在者は非物質的存在者 (immaterielles Wesen) と呼ばれ、またそれらが理性を有するなら霊と名づけられるであろう」(II321) とする。しかし「霊的と名づけられる種類の存在者がそもそも可能的であろうかさえ、決着がついていない」(II322) ので、このような「最も深遠で曖昧な問題について」(II322) 性急な決定を避けるべきとする。

そこでカントは、二つの方途を考える。まず一方で、決定方向の一つとして「通常の経験を頼りに」(II324) するのである。なぜならヒュームの影響により「通常の経験概念に属することは、通例、その可能性も洞察されるように見なされるのを常とする」(II322) が「それに反して経験概念から外れ」(II322) る場合「不可能として即座にしりぞけられるのが常である」(II322) からである。このようにカントは、非物質的存在者に対しては「通常の経験」に依拠して対応する。しかし他方でカントは「事物 (Ding) とは別の種類の実体〔霊〕を仮定して、そうした実体は空間を占めている」(II322) が「経験表象と少しも類比 (Analogie) を持たないから」(II323)「一種の思考不可能性が必然的に生じるに違いない。しかしだからといって、不可能性が認識されるものと見なすことはできない」(II323) とする。以上のことから、カントは「反駁される心配なしに、非物質的存在者の可能性を仮定するすることができるが、しかしまたこの可能性を理性的根拠によって証明できることを望まない」(II323) とする。このように「私〔カント〕は、世界における非物質的本性の存在を主張し、私の魂 (Seele) そのものをこれらの存在者の部類に入れることに大いに傾いていることを告白する」(II327) とし、事物の世界とは区別された別の世界を仮定するのである。しかしカントによって仮定された別の世界〔可想界〕は、勿論スウェーデンボリや哲学者のいう霊

界とは区別されたものである。そしてカントは双方の世界の関係を「形而上学のもつ結び目を解くもよし、切るもよし」(II319)と曖昧に表現した上で、さらに「霊界との交互作用を明らかにする神秘哲学(geheime Philosophie)の断片」(II329)章を論述するという「危険な道をあえて行こう」(II329)とする。

4 カントは、霊界との交互作用の問題意識を明確にするため、物質と非物質の二つの世界の関係認識から始める。まず「物質は、固体性、延長および形を持ち、物質の現象の法則」(II329)では「物的存在者(körperliches Wesen)が物質的世界(materielle Welt)」(II329)であり「物理学的、数学的、機械的説明」と呼ばれる。一方「非物質的存在者の作用法則は、霊的と呼ばれ」(II329)その「非物質的存在者は、自己活動の原理であり、実体であり、それ自体で存立する本性」(II329)である。そしてこの非物質的存在者の「全体は非物質的世界(immaterielle Welt)(mundus intelligibilis 可想〔知性〕界)と呼ばれる」(II329)。それゆえ「人間の魂はこの世において同時に二つの世界と結びついている」(II332)。つまり一方で「魂は身体と結びついた人格的統一体となっている間は、物質的世界のみを明瞭に感覚する。しかし他方で霊界」(II332)では「魂が常に霊的本性との間に結んでいる交互作用のみが残存する」(II332)ものとなる。換言すれば「人間の魂は」物質的世界と同時にそれと異質の非物質的世界に結びつくものである。それゆえカントは「もしわれわれが表象するような体系的霊界の組織」が「蓋然的に過ぎないとも推論され」(II333)そして「明証性からはほど遠いとしても」(II334)カントは、その推論をあえて試みるとする。

そこでまずカントは「人間の魂」と結びついている「二つの世界」では「人間の心情(Herz)を動かす力」(II334)に「二つの力の争いが生じる」(II334)とする。その争いは心の「一切を自己へ関係づける特性〔私益性〕」と「自己の外なる他に対して引きつけられる公益性」(II334)の対立である。この対立関係について「差し当たり、われわれの課題〔意志〕に関わる」(II334)限りで「公益性」には「われわれの内に、いわば自分のでない意志が働いており」(II334)「われわれの外なる他者の意志の中にわれわれを動かす力がある」(II334)とする。そしてそれによってわれわれは「われわれが最も内密な動機において一般的意志(allgemeine Willen)の規則に依存することを知り、そしてそれらすべての思考的本性の世界の中に単に霊的な法則による道徳的統一と体系的組織とが生じる」(II335)とする。しかしカントは、その「道徳的統一が生じる」という事態は、現象の原因ではなく、結果であると見なす。その限りでカントは「非物質的世界」としての「霊界においては」、「霊的完全性」(II335)は「霊的法則に従う」(II336)とするのである。従ってカントは「公益性」を手掛かりとして霊界に道徳的世界を見出し、そこに「一般的意志の規則」を推論しようとする。しかしその試みが推論である以上「一般的意志の規則」の明証性は得られない。つまりカントによれば「霊界の表象」は「単なる推論によって得られるが、その表象はいかなる人間においても、直観的かつ経験的概念ではない」(II338)のである。しかしながらカントによれば「霊界側か



らの影響がこの世においてすら、ときには意識されるという一切の可能性を廃棄すると考えてはならない」(II338)とする。なぜなら「霊界側からの影響」は「諸概念の連合された法則に従って」(II338)そして理性の限界を越え、比喩による「類比的 (analogisch)<sup>18)</sup> 表象」(II339)であるので、われわれの「意識に入り込むことができる」(II338-339)からである。そしてカントは「もう一つの世界の直観的認識がこの世で得られるのは、ただ現在の (gegenwärtig) 世界に対し、必要とされる知性をいくらか損なうことによって可能である」(II341)とするのである。

5 次に「霊界との交互作用を廃棄する一般哲学 (gemeine Philosophie) の断片」(II342)章で、カントによれば「夢を見る」人々は「他者の世界を排除し、自分の世界に安住している」(II342)。そして「その際、経験そのものは意識されず」(II320) 認識し得ない概念を認識し得るとする「窃取された概念」(II320、II342) から形而上学を構想する「思想的世界の空中楼閣建築師たち」(II342) を「理性の夢想家」として、哲学者ヴォルフ (C. Wolff) やクルージュス (C. A. Crusius) の名を挙げる。一方「霊に関係するような人」(II342) スウェーデンボリは「感覚の夢想家」(II342) とされ、かれもまた「他の健全な人が一人として見ないような何かを見る」(II342) という同じ理由で「理性の夢想家」と「類縁関係」(II342) にあるとする。しかし「理性の夢想家」と異なり「感覚の夢想家」は「感覚の妄想および高度においては錯乱 [狂気] と名づけられるような種類の心の障害」(II346) を持つとカントは考える。そこでカントによれば「この病気の特徴は、精神錯乱の人間が、かれの構想の単なる対象を、自己の外に移し、現実にかれの眼前に現在する事物と見なすという点にある」(II346) とする。そしてこのような病人は「形而上学の夢」を見る視霊者であるので、カントは「読者が視霊者を、今一つの世界の半市民 (Halbbürger) と見なす代りに」(II348) 「入院候補者として対処しても」(II348) 良いと読者に勧める。とはいえカントは「理性の夢想家」と「感覚の夢想家」のどちらも「理性的な思考の方式」(II347) に合わないというように、性急に決着をつけないとする。

6 カントは第一部「理論的結論」において、まず以上に見られた二つの夢想家の物語について「霊の物語の一つ一つはことごとく疑うが、全てを総括したものには、いくらか信を置くという奇妙であるが、通常の留保条件をもって、様々の霊の物語に対して全く一切の真理を拒否するということを私はあえてしないようにする」(II351) とし、いわば「秤」(II349) の比喩を用いて霊の二義性を示そうとするのである。つまり一方で「霊の物語」を疑うとは「人間の知性のように限られた知性にとっては」(II351)、自然の一部ですら多様であるので、物語は「測り知れない」(II351) ましてや霊界は知ることはできない。他方で「霊の物語の一切の真理を拒否」(II351) せず「信を置く」とは「霊的存在者について恐らく将来なお、あらゆる種類のことを考えることができる」(II351) とし、そこに可想界を想定することである。このように確定された立場からカントは

「人間の靈魂学は、そのように推論される種類の〔靈的〕存在者に関して、人間は必然的に無知である学説と呼ばれうるし、靈魂学の課題は、それで十分に果たされることができると結ぶける。換言すれば「秤」の用具を用いて、一方で夢想家の見る「形而上学の夢」は、人間認識の限界を越える靈界であるのに対し、他方でカントは、そこに可想界を見るというものである。

7 カントにより批判された哲学は「その自惚れのゆえに、いかなる空虚な問いにも答えようとする」(II353)。一方カントは「経験と常識の低地」(II368)を「われわれの指定された場所と見なす」(II368)ので「私にはこの〔夢想家〕問題全体が重要だと思われない」(II354)と批判する。しかし「靈の影響に好意的な人々」(II354)もいるので、読者が両者のいずれを評価するにせよ、カントはその判断を読者に委ねたいとする。

さてカントが取り上げる視靈者とは、既述の「ストックホルムに住むスウェーデンボリという裕福な資産家」(II354)である。スウェーデンボリのいうところによれば、彼は「靈や死者の魂と極めて親密な交際をしており」(II354)しかも「自分の発見を大著」にして出版している。その著書が『天界の秘儀』である。カントは、その大著を「靈界に行く一狂信家の忘我的旅行」(II357)と評し、次のように言う。「かれ(スウェーデンボリ)のいうところによれば、全ての人間は、靈界と等しく緊密に結合しているが、ただ人々はそれを感じていないだけである。かれと他の人々との違いは、かれの内奥部が開かれていないというだけのこと」(II361)である。そして「スウェーデンボリの夢想における主要概念を述べれば、物的存在者は、それ自身によって存続するのではなく、靈界を介してのみ存在する。しかし個々の物体は、一つの靈を介してではなく、総合された全ての靈を介して存在する」(II364)のである。これに対し、カントは「全ての認識は、一方はア・プリオリ、他方はア・ポステリオリ……の立場で認識を把握することができるということを誰でも知っている」(II358)ので「スウェーデンボリの大著は全く空っぽで、理性が一滴もない」(II360)とする。このようにしてカントは、読者に対し「何ら新たな洞察を提供しなかったとしても、私は妄想と空虚な知を取り除いた」(II368)とするのである。

8 学問にとり重要なことは「経験と常識」および「人間理性」を現わすものとなるが、カントはこの「経験」と「理性」は「非常に似ていない本性の二つの努力が、初めは甚だ異なる方向に出発したけれども、最後には一つに合流する」(II369)ものとする。カントはこの二つの概念の合流から、新しい学問の確立を試みる部分が「本書全体の実践的結論」(II368)である。そこでは経験と理性の関係は「経験によって知恵に至るまでに成熟した理性」(II369)とされるように、経験から理性に至り、そして「最後に学問は、人間理性の本性によって課せられた自らの限界の規定に達する」(II369)のである。つまり「形而上学は、人間理性の限界の学」(II368)となり、そして「その時、形而上学でさえ、知恵の侍女(Begleiterin der Weisheit)となる」(II369)。このようにして

カントは従来の伝統的な学問に対して、新しい知恵の学を提起する。では「真の知恵」(II372)とは何か。「真の知恵は、単純さ (Einfalt) の侍女である」(II372)。そして「真の知恵にあつては、心情が知性に教示を与えるから、単純さは通常博識の大げさな準備をする必要はない」(II372)のである。カントによればこのように「単純さ」こそが「真の知恵」を意味するのであり「道徳的信仰 (moralischer Glaube) もまたそのような事情にある」(II373)とする。そして「道徳的信仰のみが、いかなる事情にある人間にも妥当することによって、それ〔道徳的信仰〕が人間を真っ直ぐに人間の真の目的に導く」(II373)とする。

### 3 結

カントによれば、視霊者のいう霊界と、カントのいう非物質的世界としての別の世界には「類比的表象」があるので、その表象に一種の思考可能性があると考えている。つまり霊界との類比を用いて、可想界を想定しようとするのであり、その可想界に道徳的世界を位置づけようとするものである。

(未完)

#### 註

カントの著作からの引用は、アカデミー版カント全集に基づき、巻数をローマ数字、原著ページ数をアラビア数字にて本文中に( )で示すものとする。

- 1) Kant, Immanuel. : *Bemerkungen zu den Beobachtungen über das Gefühl des Schönen und Erhabenen*, 1764-1765. in : *Kant's gesammelte Schriften*. Hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften. (abgek. KGS) Bd. XX, Berlin 1942. カント・尾高達雄訳「『美と崇高の感情に関する考察』覚え書き」『カント全集』第十六巻所収、理想社、1966年。カント・久保光志訳「『美と崇高の感情に関する観察』への覚え書き」『カント全集』18所収、岩波書店、2002年。
- 2) Schmucker, Josef : *Die Ursprünge der Ethik Kants in seiner vorkritischen Schriften und Reflektionen*, Meisenhienm Glan : Auton Hain, 1961. S. 128.
- 3) Ebd. , S. 201.
- 4) Zu Johann Gotthelf Lindner, 1759. 28. Oct. *Kant's Briefwechsel*. in : KGS. Bd. X, Berlin und Leipzig 1922. S. 18. カント・門脇卓爾訳「6 ヨハン・ゴットヘルフ・リンドナーあて (ケーニヒスベルク 1759年10月28日)」『カント全集』第十七巻、書簡集 I 所収、理想社、1977年。カント・北尾宏之訳「3 カントよりリントナー宛 1759年10月28日 ケーニヒスベルク」『カント全集』21、書簡 I 所収、岩波書店、2003年。
- 5) Kant, I. : *Nachricht von der Einrichtung seiner Vorlesungen in dem Winterhalbjahre von 1765-1766*. 1765. in : KGS. Bd. II, Berlin 1912. カント・川戸好武訳「1765-1766年冬学期講義計画公告」『カント全集』第三巻所収、理想社、1965年。カント・田山令史訳「1765-1766年冬学期講義計画公告」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 6) Kant, I. : *Untersuchung über die Deutlichkeit der Grundsätze der natürlichen Theologie und der Moral*, 1764.in:

- KGS. Bb. II Berlin und Leipzig 1912. カント・川戸好武訳「自然神学と遺徳の原理の判明性 (1764年)」肺ソト全集』第三巻所収、理想社、1965年。カント・植村恒一郎訳「自然的神学と道徳の原理の判明性」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 7) Baumgarten, Alexander Gottlieb : *Metaphysica*, 1739. Die Vorden zur Metaphysik/Alexander Gottlieb Baumgarten ; Hrsg. übersetzt und kommentiert von Ursula Niggli. . Frankfurt am Main :V. Klosfermann, c1999.
- 8) Meier, Georg Friedrich : *Auszug aus der Vernunftlehre*. 1752. Nobert Hinske ; erstellt in Zusammenarbeit mit Heinrich P. Delfosse und Heinz Schay : unter Mitwirkung von Fred Freibert. . (et al.) ; ; set. . Frommann-Holzboog, c1986.
- 9) Baumgarten, A. G. : *Initia philosophiae practicae*, 1760.
- 10) Kant, I. : *Entwurf und Ankündigung eines Collegii der physischen Geographie*, 1757. in : KGS. Bd. II, Berlin 1905/1912. カント・亀井裕訳「自然地理学講義草案 (1757年)」『カント全集』第一巻所収、理想社、1966年。カント・植村恒一郎訳「自然地理学講義要綱および公告」『カント全集』2所収、前批判期論集Ⅱ、岩波書店、2000年。
- 11) イソクラテス (Isocrates, 前436-338)、ソクラテスの弟子、弁論史上の巨人。参照、G. Mathieu et É. Brémond ed., *Isocrate: Discours* (Paris : Les Belles Letters, vol. 1, 1929, vol. 2, 1939, rev. et corr. 1967, vol. 3, 1942, vol. 4, 1962) . イソクラテス・小池澄夫訳『イソクラテス弁論集』西洋古典叢書、京都大学出版会、1998年。
- 12) テレンティウス (Publius Terentius Afer, 前185 (又は195) -159)、古代ローマの喜劇作家。テレンティウス・鈴木一郎訳『古代ローマ喜劇全集、第5巻、テレンティウス』東京大学出版会、1979年。
- 13) Schultz, Uwe : *Immanuel Kant*. in : rowohlts monographien, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Reinbek bei Hamburg 1965. S.83. シュルツ・坂部恵訳『カント』(ロロロ伝記叢書) 理想社、1982年。
- 14) Swedenborg, Emanuel : *Arcana coelestie* (1749-56): the heavenly Arcana contained in the holy scripture or word of the Lord unfolded beginning with the book of Genesis : together with wonderful things seen in the world of spirits and in the heaven of angels/by Emanuel Swedenborg, London : Swedenborg Society, v. I-V. 12. -Swedenborg Society, 1922-(1980).
- 15) Kant, I. : *Träume eines Geistersehers, erläutert durch Träume Metaphysik*, 1766. in : KGS. Bd. II, Berlin 1912. カント・川戸好武訳「視霊者の夢 (1766年)」『カント全集』第三巻所収、理想社、1965年。カント・植村恒一郎訳「視霊者の夢」『カント全集』3所収、前批判期論集Ⅲ、岩波書店、2001年。
- 16) Zu Moses Mendelssohn, 1766. 8. April. *Kant's Briefwechsel*. in : KGS. Bd. X, Berlin und Leipzig 1922. カント・門脇卓爾訳「15 モーゼス・メンデルスゾーンあて (ケーニヒスベルク 1766年4月8日)」『カント全集』第十七巻、書簡集Ⅰ所収、理想社、1977年。カント・北尾宏之訳「10 カントよりメンデルスゾーン宛 1766年4月8日 ケーニヒスベルク」『カント全集』21、書簡Ⅰ所収、岩波書店、2003年。
- 17) Bernet, Joannes : *Platons Opera*, Tomus I, *ΘΕΑΙΤΗΤΟΣ* ; Oxford Classical Texts, April 1928. p. 179b. プラトン・田中美知太郎訳「テアイテトスー知識について」『プラトン全集』2所収、岩波書店、1974年。
- 18) カントのアナロギア研究には、次の文献が挙げられる。石浜弘道『カント宗教思想の研究—神とアナロギア』北樹社、2002年。

(筆者は、名古屋市立大学大学院人間文化研究科名誉教授)